

## シェニエ研究ノート：「騒擾の原因について」

永田，英一

<https://doi.org/10.15017/2332723>

---

出版情報：文學研究. 73, pp.87-97, 1976-03-30. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

## シエニエ研究ノート

—「騷擾の原因について」—

永田 英一

革命の中の詩人アンドレ・シエニエの主要な「政治的散文」を、若干、私は本誌に紹介したが、ある事情から、その一篇を今日まで留保してきた。というのは、それはアンドレと実弟マリ・ジョゼフとの、あの忌わしい不和確執の契機となったもので、それ自身、別個にかなり膨大な調査を要する研究課題を提供しているからだ。——この機会に、その一篇「騷擾の原因について」の本文を左に訳出することを許されたい。

- 1) André Chénier (1762-1974)
- 2) Marie-Joseph Chénier (1764-1811)
- 3) *De la cause des désordres qui troublent la France et arrêtent l'établissement de la liberté, 1792.*

詳しくは「フランスを攪乱し、自由の確立を阻止する騷擾の原因について」

\*

ジャコバン（修道院）に本拠を置く「憲法友の会」は、その会報に見られる通り、しばしば、パリと王国の中に平静を取り戻し、確保するための諸方策を審議した。私は、かつてこの結社の会員であったこともなく、また一度もそれを見たことさえなかったのだが、このたびは心底からこの結社に加担して、それが立てている誓願、そして善良な市民のものでもある誓願に賛成する。そして諸悪の救済策を見つげるため

には、その眞の根源を知らねばならない故、私は、すべての新しい事態に随伴する紛争の特殊な、一時的な若干の原因には留意することなく、諸々の騷擾混乱の豊かな一般的な原因であるとみずから信じるものを指摘しよう。これらの混乱無秩序は、人類が他日フランスに感謝の意を表するであろう革命につづいて、われわれを攪乱しているのだ。

パリの真中に多数の人々が頻繁に集まる一つの結社が存在する。そしてそれは愛国者、あるいは愛国者と目されるすべての人々に開かれており、つねに眼に見える、あるいは眼に見えない指導者達によって、統率されているが、かれらはしばしば変わり、互いに殺し合いながら、しかもみんな支配する、という同一の目的をもち、またあらゆる手段によって君臨する、という同一の精神をもっている。この結社は、もともと自由の勝利がもはや不確実ではなかったけれど、しかしまだ自由の固まっていたいなかった時機に設立されたもので、必然的に、多数の不安動揺した、そして大義名分への熱烈な愛にみちた市民を惹きつけた。若干の人々は明智よりも熱情をもっていた。多くの偽善者がその人々と一緒にこの結社へ滑り込んだ。借金を背負い、職業もなく、無為怠惰から貧乏で、何らかの変化の中に望みの綱を見出そうとしていた多くの人物もまた同様であった。若干の正しい賢明な人々は、よく統治された国家においては、すべての市民が公務を行うのでなく、みんながそれぞれの家業に励むべきだということを心得ていて、その後そこから身を引いた。という次第で、この結社を構成するものは、大部分、一六勝負のお膳立てをしてこれを利用する巧妙な賭博師連とか、その他、貪欲と害悪をなす習慣が精神の代りをする下等な策士どもとか、また、誠実だが、無知短見で、いかなる悪意も抱きえないが、それとは知らずに、他人の邪悪な意図に奉仕しがちな多数の閑人連なのだ。

この結社は無数の他の結社を産んだ。多くの市町村が結社にみちている。そしてほとんどすべてが母なる結社の命令に従順で、それと非常に活発な連絡を保っている。この結社はパリでは一個の団体であり、フランスに広がるより莫大な団体の頭である。かくて、ローマ教会も信仰を植えつけて、そして教団によって世界を支配していたのであった。

この組織は、二年前、非常に人氣のあつた人々によって構想され、実現された。これらの人々は、これがおのれの権力を増し、おのれの人氣から大きな利益を引き出す方法だということをよく看破したが、しかしこうした道具がいかに恐ろしく、かつ危険なものであるかを見なかつたのだ。これらの結社をかれらが統率していた限り、その誤謬はすべて立派なものに思われた。が、かれら自身、みずから火を点けた地雷によって破壊されて以来、かれらは、もはやおのれの利益にならぬ過激行為を憎んでいる。そしてさらに眞実を言いながら、もはや賢明ではなく、かれらは誠実な人々と同調して、おのれの昔の傑作を呪っているが、しかし誠実な人々は決してかれらと協力しはしない。

これらの結社は聴衆の前で討議し、聴衆から力をえている。けれども、もし、多忙な人々はクラブの論争の立会人になるために自分達の仕事を怠ることは決してしないと、また明識ある人々が求めるものは書齋の静けさや平和な会話であつて、こうした騒々しい論戦の喧しい叫喚ではないということを考えるならば、こうした聴衆を構成する常連が果していかなる連中であるかが、容易に判断されるであらう。また同様に、かれらの好意をえるために、いかなる言葉が適切であるかが理解されるであらう。

ちよつとした曖昧な言葉使いで、万事足れりであつた。憲法は「人民主権」という、この永遠の真理に基づいているのだから、クラブの傍聴席に、その連中が「人民」であることを説得するだけで十分であつ

た。

こうした語義の決定は、ほとんど一般的に、新聞作りの、政論記者連によって採用されている。そして公園や劇場に集まった幾百人もの閑人どもとか、あるいは店舗を襲撃する盜賊の群とかが、厚顔にも「人民」と呼ばれているのだ。そして毎日二、三千人もの国民主権の強奪者どもが、フランスを攪乱するこれらの結社の作家や演説家によって、不純な阿諛に酔わされているのだが、かつて、もつとも傲慢な専制者といえども、もつとも貪欲な廷臣からさえ、これほど卑しい、退屈な追従をうけたためしがない。

愛国心の見せかけだけが有効な徳なのだから、恥ずべき生活で名譽を傷つけられた若干の人々は、おのれの演説の激しさと愛国心を証明しようとしてそこへ駈けつける。そして過去の忘却と未来の希望を騒々しい宣言や大衆の激情に托し、無謀な言動で汚辱をあがなうのだ。

そこでは、連日、あらゆる財産とあらゆる所有権を脅やかす諸種の意見や主義主張が表明される。「買占め」とか、「独占」とかの名で、産業や商取引が違法行為として摘発される。すべての金持は公敵と看なされる。野心と貪欲は名譽も世評も容赦せず、もつとも嫌らしい猜疑と勝手気ままな中傷が「意見の自由」と呼ばれる。非難告発の証拠を求めるものは、怪しい男、人民の敵なのだ。

そこでは、すべての不条理が、人殺しであれば、賞讃され、すべての嘘が、残酷であれば歓迎される。女たちは血醒い狂気の癡癡に拍手喝采するためにそこへ行くのだ。

真実であれ、虚偽であれ、密告はすべて賞讃すべき有益なものだという教義が、そこでは単に実践されているばかりか、少くともジェズイットが「真実らしい意見」と呼んだものと同様に、教え込まれているのだ。一人の男（*Dubois de Crance* 一七九一年十二月）が罵詈譏、非難中傷にみちた演説をする。会衆一同、勇ん

でその印刷を決定する。ついで、何故これを発言した通りに公刊しなかったのか、また何故その成功の因となったあの華々しい告発の幾つかを削除したのかと問われて、その男は、実は、自分の言ったことがすべて本当に真実であったかどうか確かでなかったし、また自分は刑事裁判に身をさらしたくなかったのだと答えるが、この率直さは、かれ自身にも、またその時かれが議長をつとめた人々のためにも名誉を傷つけるものではない。

そこでは、また時には罪人達も攻撃される。そして残忍、猛烈、悪意をもって攻撃されるので、かれらは無罪に見えるほどだ。

そこでは愛国心の免許状が授与される。これらの結社組織のあらゆる成員、あらゆる友はよき市民であり、その他はすべて裏切者なのだ。この団体への入会許可さえあれば、コンスタンチヌスの洗礼のように、あらゆる罪科は洗い落され、血と殺戮は拭い消される。アヴィニヨンの怪物ども(一七九一年十月、暴動を起した貴族達)は、そこに味方、擁護者、羨望者を見出したのだ。

これらの結社は、みんな互いに手をつなぎ、フランスのまわりに一種の電気の鎖を作っている。同時に、全国津々浦々で、それらは一斉に騒ぎ立て、同じ叫声をあげ、同じ運動を伝播するが、それは確かに前以って予言して憚らなかつたところだ。

これらの結社の喧しい活動は、政治を恐ろしい無気力の中に陥れた。予備選挙や本選挙の集会で、かれらの暗躍陰謀、かれらの恥ずべき騒動が、多くの誠実な人々を逃避させた。といっても、この人々の弱気も大いに責められるべきだ。そしてかれらは破廉恥な人名で、幾つかの有望ある高官達の名簿を汚した。到るところで裁判官、行政官、かれらの手先や子分でないあらゆる公吏達は、かれらの仇敵であり、かれ

らの迫害の目標になる。公権力の諸機構の強奪者にほかならぬかれらは、こちらでは、裁判所へ押しかけて、その活動を中止させ、あちらでは、市町村の吏員団を無理に呼びつけておのれの命令を受けさせる。

諸処で、かれらは強引に市民の住居へ押し入り、あえて身体検査をしたり、裁いたり、断罪したり、放免したりした。合法政府への叛徒は、かれらのところに保護と支持を見出す。愛国者を自称し、法とその機関を冒瀆したすべての男が、かれらの間へそれを自慢しにやってくる。中にはおのれの犯罪だけでなく、正しくかれらの名誉を傷つけた司法行為をも得々と誇るものも見られた。罷免された下役や中傷者は、すべておのれの愛国心の犠牲なのだ。暴動を好む叛乱兵士は、すべてかれらに市民の栄冠を求めることができる。侮辱され、あるいは殺された隊長は、すべて間違っていたのだ。一群の亡命叛徒が、外国人の悪意に助けられて、われわれに戦いを宣していると思われる時機に、かれらは軍隊に向かって將軍達を警戒すべき裏切者だと呼ぶ。誰でも法を履行しようと欲するものは、非国民、反革命として、かれらの間で告発され、また広場でもかれらによって、さらには国民議会の議席でもかれらによって指弾される。

かれら自身もまた、法の不履行を歎くことをやめない。かれらが毎日その前進を妨げているこの政府、それが一向に進展しないと毎日非難している。毎日、かれらは憲法を援用し、しかも毎日かれらの言動はこれを冒瀆しているのだ。そして毎日、かれらの中から、請願者の大群が飛び立って、憲法に対する愚劣な暴言で、その憲法そのものの作られた議場の天井を鳴り響かせに行くのだ。

かれらは全フランスの面前で、代議員を受け入れるが、その代議員達は、まるで立法議会も、裁判所も、行政部も存在しないかのように、法律とか、何かの損害賠償とか、あるいは公吏の更迭とかの許可をえるために、かれらに訴えるのだ。

そして憤激と苦痛が人々の心を掻き立てると、かれら自身、みずから引き起し、かつ維持している混乱無秩序に対して、誰よりもわめき立てるのだ。かれらはおのれの所業をかれらが圧迫しているすべての人々の罪にする。そして仮面をすっかり脱いで、かれらはパリの真中で武装をさせ、かれらの戦争準備を隠そうとしない。ついに、フランスの南部では、もし公的権力が法の服従者としての義務に立ち帰らせようと試みる場合には、町から町へと、武装兵力の支援をあえて決意したのだ。

あらゆる官公庁の記録、国民議会の議事録、あらゆる新聞、また特にこれらの結社の中から出る刊行物、周知の事実、全フランスの眼と良心が、この忌わしい叙述に嘘偽りのないことを証明するであろう。かくて憲法をもつこの国家を、かれらは正しく渾沌の中に投げ込んだのだ。かくて、恐怖によって、あるいは失望落膽によつて、かれらは才能と誠実を沈黙せしめたのだ。そして心の正しい真つ直な人（というのは、こういう人こそ自由なのだ）は、自分に予告されていたものと自分が目に見るものとの間に、憲法とその友と称する連中との間に、また保護を約束する法律と法律よりも声高に語る人々との間に立つて、驚きあきれ、嘆息しながら自分のかくれ家へ帰る。そしてなおも法と理性の支配が、ついにはこの地に歓喜をもたらずだろつと努めて希望するのだが、ここでは平等の名において人を圧迫し、そして自由の女神像は若干の圧制者の意志を刻するために用いられた極印にすぎないのだ。

確かに、こうしたすべての事が国民議会のある議員（Dieu Cadeau、一七九二年一月二十一日、Vauban）に、よく知られていなかったとは、実に驚くべきことだ。というのは、ほんの二、三日前、その議員は、かくも誤つて「愛国的」と称されるこうした結社の横暴の幾つかを挙げてみよと公然と要求したのだ。そして實際こ



の信じがたい挑戦は議會に一大驚愕をもたらしたに違いない。なぜなら、議會は私が今なした思わしい列挙によつて、十二分に応答するために一斉に立ち上らなかつたのだ。

ある高官の名で一通の書簡が現れた。(パリ市長 M. de la Roche の書簡「わが現状について」。これは私には甚だ單純なものに思われたが、他の人々はこれを危険なものだと判断した。かれらはそこに、公の利益の最大の敵なる徒党に奉仕し、もつとも邪悪な、もつとも反社会的な情念を正当化し、そして何もたぬすべての連中を何かをもつすべての人々に対して武装させようとする欲望を見ると信じたのだ。けれども、私はこの高官を少しも知らないし、また私の全然好きでない、そして決して尊敬してはいない人々によつて賞讃されるのを聞いてはいるが、しかし私としては、かれの行動の中にも、書きものの中にも、そうした疑惑を抱かせるものは何も見なかつた。それはともかく、この書簡は、いろいろな箇所で、さまざまな仕方で「ブルジョアジーはもはや革命にさほど執着していない」と断言している。この重要な事実がもし真実ならば、それはきつとこの高官に、書簡に見られる考えとは違つた考えを抱かせたであらうと私には思われる。これはきつとこう考えたであらう。自分がブルジョアジーというこの語で指し示す階級は、富裕の悪徳と貧困の悪徳との間に、また贅沢三昧と極端な欠乏との間に位置する階級であつて、およそ用語に意味の与えられるいかなる場所、いかなる時代にも、本質的に真に「人民」の全体を形成するものだ。またこの階級はもつとも質実、もつとも賢明で、もつとも活動的であり、およそ誠実な職業のもたらす賞讃すべき立派なものにみちている。そしてこの階級全体が不平不満である時には、法律や政治における何か内部の悪徳を責めなければならぬ、と。人々の間に平等を打ち立てる法、あらゆる種類の事業にもつとも広い、もつとも自由な領野を開く法、またいかなる人間の作品も免れえない欠陥にもかかわらず、少なくとも、明ら

かに万人の利益の上に万人の和合と幸福を打ち立てるべく予定された法は、確かにこれらの不満の原因ではありえない。それ故、政治が法に反するか、あるいは政治が全く力をもたないかのいずれかでなければならぬ。もしこの高官が、ついで自分の周囲を見渡したならば、またかれが無力な裁判所、権力と思慮もない行政官、また自国の財政状態や負債の状態、租税や国有財産について憂慮するフランス全体を、従つて自己の私有財産について不安な各私人、また商業取引を阻止したり、急がせたりする不信と恐怖、危機に瀕したもつとも合法的な投機、商品価格に課税する多くの試み、そしてこれらのすべての原因の必然的結果である手形証券の不信用などを見たならば、かれは日毎に増大するこの不平家達の数を説明するのに困惑しなかつたであろう。ついでかれは政治のあらゆる部門における、かくも信じがたい弛緩や、善良な人々のこの恐怖、また悪人どものこの大膽さがどこから生れ出るかを探求したであろう。私はかれの眼がこれらの結社以外のところに注視すべきものを見出したかどうかを疑う。こうした結社では、ごく少数のフランス人が、結託してどなり散らす故に、大多数に見えるのだ。

そしてそこで、かれらの行動や組織と、かれがよく秩序づけられた自由国家について抱いたに違いない観念とを比較するならば、かれは私とともに、またかくも多くの混乱無秩序に加担するペテン師の仲間でもなく、一切の推理の禁止された馬鹿でもないすべての読者とともに、次のように結論したであろうと私は考える。すなわち、かかる結社組織の傍には政府を確立し、強固にすることは絶体に不可能だ。これらのクラブは自由にとつて禍であり、またそうであるだろう。それらは憲法を破壊するであろう。コブレンツの狂信的な一群(亡命貴族)も、これ以上に確かな補助者をもつてはいない。これらを破壊することがフランスの災禍への唯一の救済策なのだ。そしてその死滅の日こそ公衆の愉快な祝祭日となるであろう、と。

かれらは到るところで祖国は危機に瀕していると叫ぶ。不幸にしてそのことは正に真実である。そしてそれはかれらが存在する限り、真実であるであらう。

アンドレ・シエニエ

\*

見られる通り、これは明らかに「憲法友の会」の左派（ジャコバン・クラブ）に対する痛烈な非難攻撃であるが、アンドレはさらに編集者あての「追伸」として、大胆な決意を述べている。——自分は決して、匿名によって、連中の怨みを恐れるような真似はしない。今後も堂々と署名論文を寄稿して、連中の不正に眞つ向から対決し、「自由を喰いものにする憎むべき攪乱者ども」に対して、力の限り「正義人道のために」復讐することに努めるであらう。

かくて「騒擾の原因について」の一文は、一七九二年二月二十六日の「パリ新聞」附録第十九号に発表された。そしてたちまち大きな反響を呼び、多くの新聞に転載されたのだが、注目すべきはマリ・ジョゼフのすばやい弁明的反論である。——

二月二十六日の日曜版「パリ新聞附録」に、憲法友の会についての一つの意見が公表された。それは「アンドレ・シエニエ」と署名されている。多くの人々は、これを『シャルル九世』や『カイウス・グラックス』（いずれもマリ・ジヨゼフの劇作品）の作者のものだと信じた。私は、はっきり言明するが、この論文には私は一切関知しなかつたし、またそれは私のものとは正反対の意見を含んでおり、私はパリのジャコバンに本拠を置く憲法友の

会の会員であることをつねに名譽とするであろう。(一七九二年二月二十八日「パリ新聞」)

マリ・ジョゼフは、あえてジャコマン・クラブの代弁者の役を買って出た。アンドレの決意は固い。あの忌わしい「仲の悪い兄弟」*frères ennemis*の運命が始まったのだ。そして一はやがて断頭台の露と消え、他は終生「きょうだい殺し」*fratricide*の十字架を背負うであろう。

\*本稿のために使用したテキストは左の諸版である。

—Beccq de Fouquières, *Œuvres en Prose d'André Chénier*, Charpentier, 1872.

—Louis Moland, *Œuvres en prose d'André Chénier*, Garnier, 1879.

—Gérard Walter, *Œuvres complètes d'André Chénier*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1950.